

古代東アジアの文物交流

－馬韓と百済を中心に－

成 正 鏞

I. 馬韓と百済の関係

韓国史において、馬韓と百済は貨幣の表裏のような存在であり、馬韓と百済は一般的にソウル・京畿道・忠清道・全羅道という同一空間を時間的な前後関係をもって占有した政治体として知られている。

では、馬韓はいつからはじまり、いつ消滅したのであろうか。これは韓国古代史において、もっとも答えにくい問題でもあるが、『三国史記』百済本紀によれば、百済は当初、漢江流域に定着しており、この時、馬韓の好意によって馬韓の東北側百里余りの土地を割譲されたが⁽¹⁾、温祚王26年（8年）に馬韓が衰弱した隙をついてその国邑を併合し、翌年に滅亡させたことになっている⁽²⁾。その後、温祚王34年（16年）に馬韓の將軍である周勤の反乱を鎮圧することによって、馬韓を完全に統合したという⁽³⁾。ところが、『三国志』魏書東夷伝韓条によれば、馬韓は3世紀代においてもいまだ存在しており、百済は馬韓50余国のなかの一小国として、伯濟国とよばれ、目支国が馬韓を代表する国であるとされている⁽⁴⁾。この目支国は辰王が統治していたが、辰王は辰・弁韓に対しても一定の支配権を行使したとされている。これがある程度、信頼できるとすれば、馬韓は少なくとも3世紀代までは存続していたが、京畿・忠清・全羅道地域を広く統治した単一政治体ではなかったことがわかる。馬韓の一小国であった伯濟国が、しだいに馬韓の諸小国を統合し、古代国家段階の百済に成長することになるのである。ところで、『三国史記』と『三国志』魏書東夷伝韓条の記録のうち、どちらが歴史的事実をより反映しているのだろうか。これまで蓄積された考古学的資料をみると、百済の国家権力の成長を象徴する都城である風納土城の

(1) A-1 「温祚王 二十四年 秋七月 王作熊川柵 馬韓王遣使責讓曰 王初渡河 無所容足 吾割東北一百里之地安之 其待王不爲不厚 宜思有以報之 今以國完民聚 謂莫與我敵 大設城池 侵犯我封疆 其如義何 王慙壞其柵」

(2) A-2 「温祚王 二十六年 秋七年 王曰 馬韓漸弱 上下離心 其勢不能久 儻爲他所并 則臂亡齒寒 悔不可及 不如先人而取之 以免後艱 冬十月 王出師陽言田獵 潛襲馬韓 遂并其國邑 唯圓山錦峴二城 固守不下」

(3) A-3 「温祚王 三十四年 冬十月 馬韓舊將周勤據牛谷城叛 王躬帥兵五千討之 周勤自經 腰斬其尸 并誅其妻子」

(4) B-1 「馬韓在西 其民土著 種植 知蠶桑 作絺布 各有長帥 大者自名爲臣智 其次爲邑借 散在山海間 無城郭 有爰襄國 牟水國 桑外國 小石索國 大石索國 優休牟涿國 臣漬沽國 伯濟國 速盧不斯國 日華國 古誕者國 古離國 怒藍國 月支國 咨離牟盧國 素謂乾國 古爰國 莫盧國 卑離國 占離卑國 臣覺國 支侵國 狗盧國 卑彌國 監奚卑離國 古蒲國 致利鞠國 冉路國 兒林國 駟盧國 內卑離國 感奚國 萬盧國 辟卑離國 白斯烏旦國 一離國 不彌國 支半國 狗素國 捷盧國 牟盧卑離國 臣蘇塗國 莫盧國 古臘國 臨素半國 臣雲新國 如來卑離國 楚山塗卑離國 一離國 狗奚國 不雲國 不斯漬邪國 爰池國 乾馬國 楚離國 凡五十餘國 大國萬餘家 小國數千家 總十餘萬戶 辰王治月支國」

築造と、三足土器をはじめとする典型的な百済土器の成立が、いずれも3世紀以後に比定されており、錦江流域では4世紀代まで原三国時代の物質文化の伝統が継続する様相がみられる。これらから考えると、馬韓は3世紀代まで存続したとみるのが妥当であろう。

では、馬韓はいつからはじまり、その空間的範囲は常に一定だったのであろうか。また、その種族的構成と文化的様相はどのようなものであったのだろうか。「韓」は、はたしていつから使われた名称であり、これはそのまま馬韓と同一視できるのだろうか。「韓」という用語は、古朝鮮の準王が衛満によって国を奪われ追われた紀元前2世紀初頭ごろに文献にはじめて登場する。『三国志』魏書東夷伝韓条には、馬韓の起源を説明する過程で、衛満に追われた準王が海を渡って韓の地に着き、自ら韓王になったが、その後に絶えて、今(3世紀頃)では韓人がその祭祀をおこなうだけであるとされている⁽⁵⁾。大同江流域にいた古朝鮮の準王が南下したところは、漢江以南のどこかであったとしかいえないが、そこが紀元前2世紀以前から韓とよばれていたのである。この韓が、韓族が住んでいた場所を意味するのか、あるいは政治的な集団としての韓、すなわち馬韓を意味するのかは定かではない。ただし、紀元前2世紀以前のある時点から準王が南遷した場所の人々は自らを韓であると認識し⁽⁶⁾、これは紀元後もつづいており、準王はその間にしばらく韓の地域を支配したが、それは長くはつづかなかったということである。このように準王が南奔する以前から存在した韓を馬韓とみる見解もあるが、準王が建てた韓国と紀元後に『三国志』に登場する馬韓は、政治的集団として直接的なつながりはなかったとみるのが妥当であろう。ただし、準王以前から存在した韓と紀元後の馬韓が、少なくとも種族的、あるいは文化的に共同体的意識をもっていたことは明らかであろう。

一方、『三国志』魏書東夷伝韓条には、桓霊の間(2世紀後半)に楽浪郡が衰退すると、郡県の民が多く韓濊の地域、すなわち馬韓に逃亡したと記されており、少なくとも紀元後の馬韓は、韓と濊が容易に区分できなかったことがわかる。広開土好太王碑にも、広開土大王が奪った百済北辺地域の民を韓濊と称したという記録がみられることから、5世紀まで百済の北辺地域を韓濊と認識していたことがわかる。

これを整理すると、馬韓の成立と成長過程は大きく3段階に分けてとらえることができる。種族的、あるいは文化的に韓は紀元前2世紀以前からはじまり、準王はこの韓に南奔し、一時期、王となったが、その後は政治的に存続しなかった。その後、2～3世紀頃に馬韓は数十の小国で構成され、そのうちの目支国が小国連合の盟主的役割を担う時期があったといえる。

本発表では、この馬韓段階と、これにつづく百済漢城期を中心に対外交流の様相について検討してみる。

II. 馬韓の対外交流

1. 文献史料

百済が成長すれば、自然と馬韓は消滅することになるが、馬韓と百済の関係、および中国との

- (5) 侯準既僭號稱王 爲燕亡人衛滿所攻奪 將其左右宮人走入海 居韓地 自號韓王 其後絕滅 今韓人猶有奉其祭祀者 漢時屬樂浪郡 四時朝謁 魏略曰 初 右渠未破時 朝鮮相歷谿卿以諫右渠不用 東之辰國 時民隨出居者二千餘戶 亦與朝鮮貢蕃不相往來(『三國志』魏書東夷傳韓條)
- (6) 青銅器～初期鉄器時代に該当するであろうが、正確にいつからなのかはわからない。

交渉主体を示す記録が『晋書』にみられる。『晋書』武帝紀と東夷伝馬韓条の記録をみると（表1）、276～291年の間に西晋に遣使する主体は、東夷諸国または馬韓（主）と記されており、百済については全く言及されていない。仮に、この記録をそのまま認めるならば、百済はこの時期においても対外交渉の主体として現れていないことになるが、百済が4世紀代に中部地域の強者に成長することを考えれば、そのまま認めるわけにはいかない。したがって、280年に西晋に使節を送った馬韓の主体を百済国とみる見解が韓国古代史学界では優勢である。すなわち、百済が対外交渉権を掌握することによって、古代国家へとさらに大きく成長する基盤を造ったとみている。

表1 『晋書』にみられる3世紀末の馬韓と中国の交流

年代	内容	典拠
276	咸寧二年 二月甲午 東夷八國歸化	晉書 武帝紀
276	咸寧二年 秋七月癸丑 東夷十七國來附	〃
277	咸寧三年 十二月 東夷三國前後千餘輩 各帥種人部落來附	〃
277	咸寧四年 三月辛酉 東夷六國來獻	〃
277	咸寧三年 復來 明年又請內附	晉書 東夷傳 馬韓條
278	咸寧四年 十二月甲午 東夷九國來附	晉書 武帝紀
280	太康元年 甲申 東夷十國歸化	〃
280	太康元年 秋七月 東夷十二國朝獻	〃
280～281	武帝太康元年（280）二年（281）其主頻遣使入貢方物	晉書 東夷傳 馬韓條
281	太康二年 三月景申 東夷五國來獻	晉書 武帝紀
281	太康二年 夏六月 東夷五國來附	〃
282	太康三年 九月 東夷二十九國歸化 獻其方物	〃
286	太康七年 八月 東夷十二國來附	〃
286	太康七年 時歲 馬韓等十一國 遣使來獻	〃
286～289	武帝太康 七年（286）八年（287）十年（289）又頻至	晉書 東夷傳 馬韓條
287	太康八年 八月 東夷二國來附	晉書 武帝紀
288	太康九年 九月 東夷七國詣校尉來附	〃
288	太康十年 東夷十一國來附	〃
288	太康十年 時歲 東夷絶遠三十餘國 西南夷二十餘國來獻	〃
290	太熙元年 二月辛丑 東夷七國朝貢	〃
290	詣東夷校尉何龕上獻	晉書 東夷傳 馬韓條
291	永平元年 時歲 東夷十七國	晉書 武帝紀

2. 中部地域の考古資料

1) 中国と楽浪

馬韓の早期には、中国戦国時代の燕と古朝鮮（あるいは濊貊社会）、韓につながる遠距離交易網が形成されたと考えられているが、これを示すものとして、錦江流域と萬頃江流域の初期鉄器時代の墳墓から出土する、いわゆる燕式鉄器とよばれる鑄造鉄器類や青色の鉛-バリウム系ガラス（チョデヨン 2007）などがあげられる。一方、桃氏剣あるいは東周式銅剣とよばれる中国式銅剣が発見された完州上林里の場合は、山東地方の工人が移住して製作した可能性が高いと考えられている（白雲翔 2017）。

その後、しだいに楽浪郡の役割が増大するものと考えられるが、中部地域における馬韓の土壙墓で注目される特徴の一つが、土壙合葬墓が盛行するとともに、北方文化と関連する要素が多くみられるようになることである。土壙合葬墓は同穴、併穴、異穴に大別することができる（図 1）。同穴同槨合葬を前提とする同穴合葬については、前述した清州市松節洞 93B-4 号墓の場合、木槨の大きさや構造は同穴合葬をおこなうのに充分ではあるが、その実態は不明であった。しかし、最近、燕岐郡石三里遺跡（図 2）などで同穴合葬が報告されており、その存在が明らかとなった。ただし、これら以外は大部分が併穴合葬と異穴合葬である。

（表 2）にみられるように、清州一帯を含む湖西地域では、これまで 19 ヶ所以上の遺跡で確認されており、ソウル・京畿地域や嶺南地域に比べて、はるかに高い比率を示している。一遺跡における合葬墓の比率も最大 30% になるほど盛行していたことがわかる。この合葬墓文化が他地域では比較的早く消滅するのに比べて、美湖川流域（清州市新鳳洞古墳群）とその周辺（燕岐郡松院里・松潭里古墳群）では百濟化したのちも、5 世紀代までつづいているのが特徴である。

楽浪地域では紀元前 1 世紀頃から併穴合葬墓と同穴合葬墓が造営され、一部で異穴合葬墓も造られているが（図 3）、1 世紀以後（楽浪 3 期）には同穴合葬墓が主体をなすようになり、改造木槨墓（B 型式）とともに多人数の合葬も盛行したとされる（高久健二 1995）。このような楽浪地域の合葬墓を起源ととらえ、その流入契機を、後漢の桓靈の末（2 世紀中・後半）に韓濊が強盛になり、多数の郡県民が韓に流入したという記録⁽⁷⁾と結びつけて解釈した（ソンデヨン 2012）。ところで、中原地域では 2 人が埋葬される異穴合葬墓と併穴合葬墓が中心を占めており、楽浪地域の初期木槨墓の様相が受容されたことを示している⁽⁸⁾。一方、合葬墓の主体部として、木棺と木槨が混用され、初期には異穴合葬墓が造営されるが、しだいに併穴合葬墓が多くなるという点は、楽浪地域の合葬墓が変容されていることを示している。

これに対して、同穴合葬墓と併穴合葬墓が楽浪系統であることは認めつつも、吉林省榆樹老河深遺跡（図 5）で異穴合葬墓とともに、銜をひねらない技法で作った轡がみられることを根拠に、異穴合葬墓を夫余と関連づけて解釈する見解も提起されている（パクチュンギョン 2012）。ただ

(7) 「桓靈之末 韓濊彊盛 郡縣不能制 民多流入韓國」（『三國志』魏書東夷傳韓條）

(8) 2015 年に清州市五松峰山里で粘土帶土器と細形銅剣が共伴する土壙墓に 2 基の木棺が合葬された同穴合葬墓が調査されており（中央文化財研究院 2016）、合葬墓文化が漢代以前にすでに韓半島に流入していたことを示唆する重要な資料であると評価される。ただし、これがこの地域における原三国時代の合葬墓と直接的につながるのかについては、資料の増加を待って検討する必要がある。

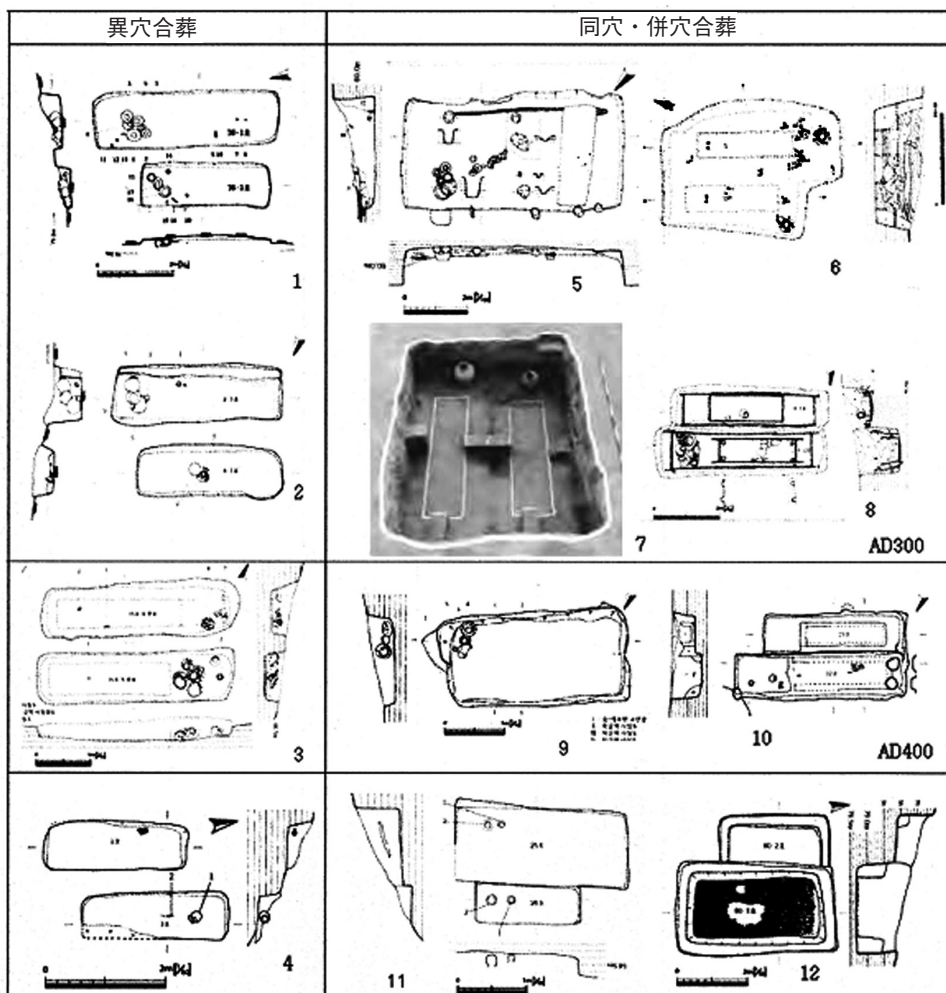


図1 中原地域の土坑合葬墓

1. 清原郡松垓里38号 2. 清原郡松垓里8号 3. 清州市鳳鳴洞15・16号 4. 清州市新鳳洞00-B-2・3号 5. 清州市松節洞93B-4号 6. 忠州市金陵洞78号 7. 忠州市金陵洞86号 8. 清州市松節洞93B-6号 9. 清州市鳳鳴洞B-13号 10. 清州市鳳鳴洞A-22・23号 11. 清州市新鳳洞25・26号 12. 清州市新鳳洞80号 (縮尺不同)

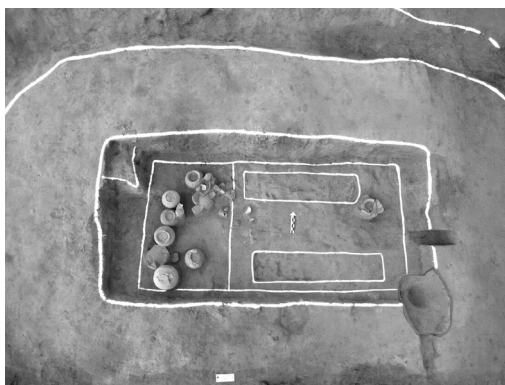


図2 世宗市(旧・燕岐郡)石三里14号同穴合葬土坑墓

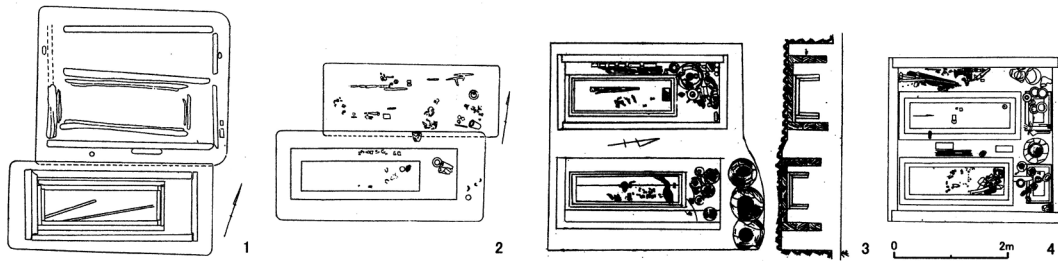


図3 楽浪地域の合葬墓

1. 平壤市貞栢洞 37 号 2. 平壤市貞栢洞 53 号 3. 平壤市貞栢洞 3 号 4. 平壤市貞栢洞 2 号

表2 韓半島中・南部地域における土壌合葬墓遺跡一覧表（キムソンオク 2015）

地域	細部圏域	形式 遺跡	単葬墓	土壌合葬墓				全体 合計	土壌合葬墓 比率
				異穴	並穴	同穴	計		
京畿地域	漢江 下流域	仁川市中山洞	1		1		1	2	50%
		金浦市陽村	42			1	1	2	2.30%
		烏山市關洞	35		1		1	2	2.80%
		龍仁市大徳谷（洞）	11	2			2	13	15.40%
湖西地域	美湖川 流域	天安市大花里・新豊里	64		1		1	65	1.50%
		清州市松節洞	13		3		3	6	18.70%
		清州市鳳鳴洞	232	7	3		10	20	4.10%
		清州市山南洞 42-6	6	2	1		3	6	33.30%
		清州市新鳳洞	297	1	4		5	10	1.60%
		清原郡松垈里	73	4	2		6	12	7.60%
		清原郡上坪里	21		1		1	2	4.50%
		燕岐郡鷹巖里	9	1	3		4	8	30.80%
		燕岐郡龍湖里	37	3			3	40	7.50%
		燕岐郡松院里	36	2			2	4	5.30%
		燕岐郡松潭里	52		2		2	4	3.70%
		燕岐郡石三里	69	2	1	1	4	8	5.50%
	錦江 中流域	公州市南山里	27	1			1	2	3.60%
		公州市徳芝里	50	1			1	2	2%
		公州市下鳳里	9	3			3	6	25%
	甲川流域	大田市弓洞	19	1			1	2	5%
	西海岸 流域	瑞山市禮川洞	103	1			1	2	1%
		瑞山市余美里	22	1			1	2	4.30%
	南漢江 上流域	忠州市金陵洞	130	3	13		16	32	11%
		忠州市文城里	67		3		3	6	4.30%
嶺南地域	洛東江 流域	尚州市新興里	121	7	7	1	15	30	9.10%
		慶州市九魚里	21	1			1	2	4.50%
		慶州市九政洞	1	1			1	2	50%
		慶州市徳泉里	124	6	1		7	14	5.30%
		慶州市舍羅里	70	2			2	4	2.80%
		慶州市朝陽洞	39	1			1	2	2.50%
		慶州市隍城洞	131	7			7	14	5.10%
		大邱市八達洞	112	2	2		4	8	3.40%
		慶山市林堂	83	2			2	4	2.30%
		密陽市貴明里	226	7	2		9	18	2.20%
計			2,353	71	51	3	125	356	4.90%

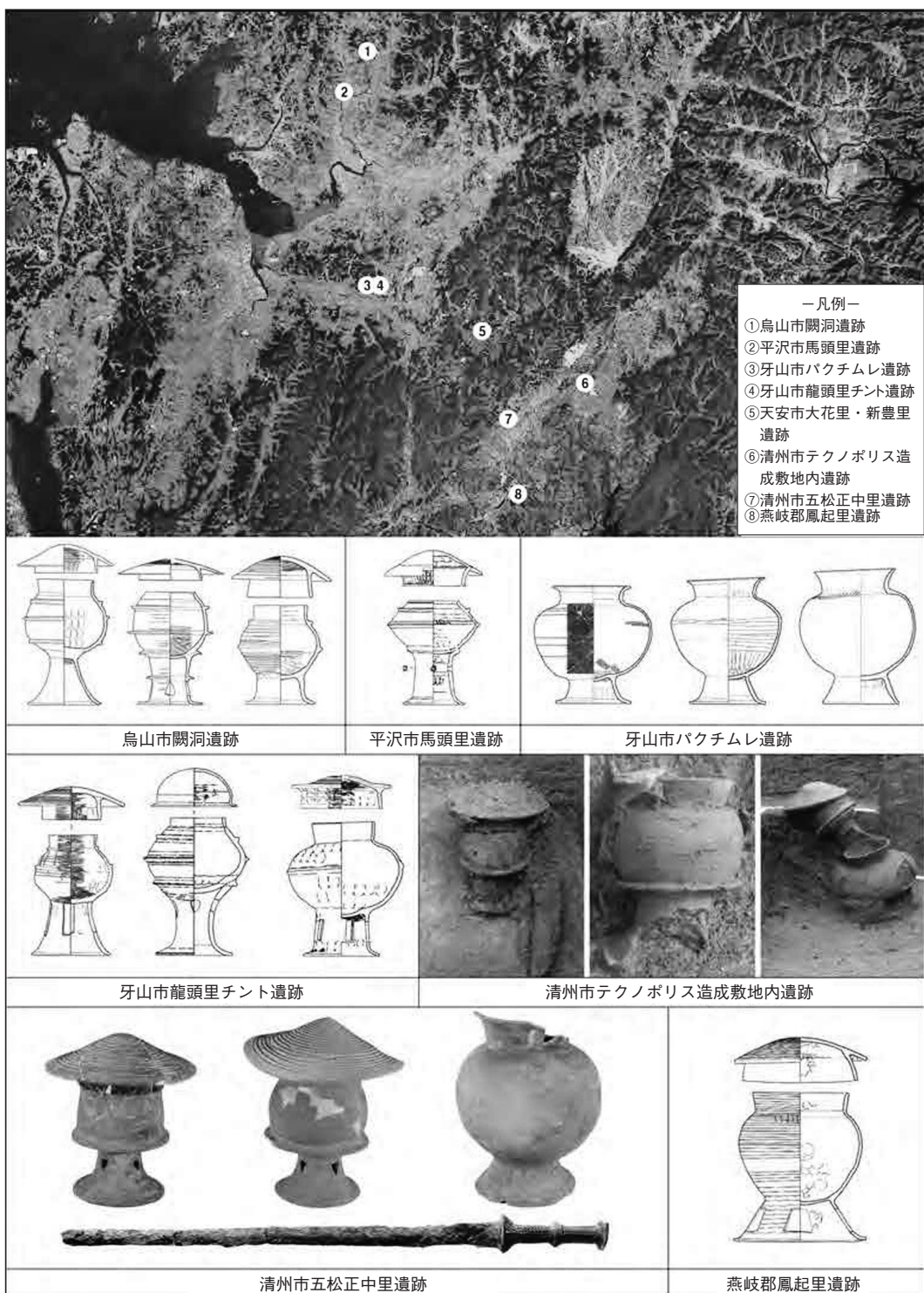


図4 中部地域出土有蓋台付土器と銅柄鉄剣（チョサンギ 2016）

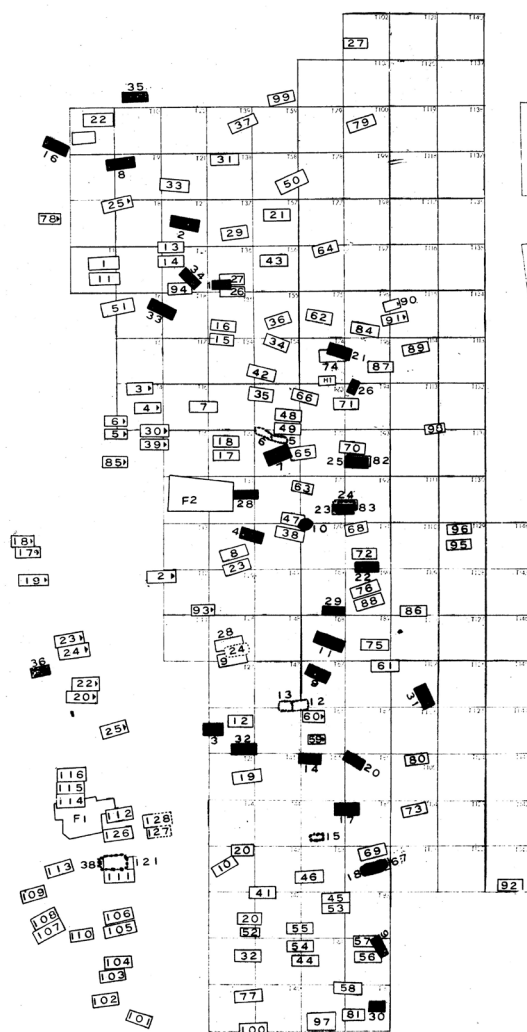


図5 楡樹老河深遺跡遺構配置図

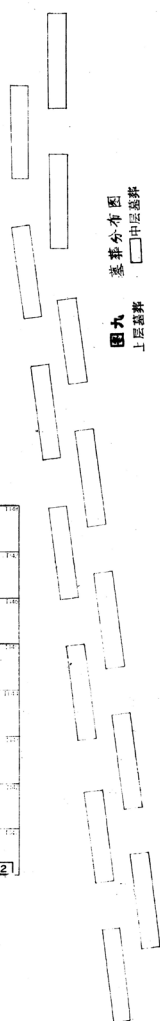


図6 老河深遺跡出土銅柄鉄剣

し、楡樹老河深遺跡でも異穴合葬墓と併穴合葬墓が混在しており、中西部地域の異穴合葬墓においてのみ、北方文化の様相がとくに目立つわけではない。同一遺跡で異穴合葬墓と同穴合葬墓と一緒に発見される点などからみると、異穴合葬墓の系統のみを分けてとらえることができるかは疑問である。

一方、楽浪地域で製作されたり、その影響を受けて作られた楽浪系土器も韓半島中部地域と東海岸地域において広範囲に発見されている。馬韓の北部、あるいはこれと関連する京畿北部－江原嶺西地方の場合、墳墓の副葬品と集落出土品のいずれにおいても楽浪系土器がみられる。前者には坡州市葛岷里木棺墓（平底短頸壺、白色甕、鉄鎌、鉄鏃）、漣川郡鶴谷里積石墓（平底壺、金屬ガラス玉、銅環、銅鈴）、加平郡達田里木棺墓（平底壺、植木鉢形土器、銅劍、鉄器類）、春川市牛頭洞木棺墓（白色土器）、金浦市雲陽洞（白色甕）・陽村（白色甕）・陽谷（二条突帯鑄造鉄斧）、仁川市雲西洞ヌンドゥル（白色甕）墳丘墓などがある（キムキョク 2014）。このほかに

雲陽洞ではジェットストーンあるいは黒玉とよばれる鉱物で作った玉が出土しているが、やはり楽浪郡と関連する可能性が高い。

また、2000年代以後、烏山市闊洞、牙山市鳴岩里、清州市松節洞などの中西部内陸地域の遺跡において、有蓋台付土器と打捺丸底鉢形土器、関部突出型鉄矛、鉄剣などが主体をなす土壌墓段階が存在することが明らかにされている（図4）。これらの土壌墓では、有蓋台付土器などとともに、後述する北方系統の銅柄鉄剣などが共伴している。このうち、有蓋台付土器は単一器種でなく、倉庫や井戸など多様な形態を形象化した一種の形象器物とみられるが、その起源は中国漢代の文物に求めることができると考えられる。一方、打捺丸底鉢形土器については多様な議論があるが、中国山東地方にその起源を求める見解もみられる（キムジャンソク 2014）。現在、これらが出土する土壌墓はおおよそ2世紀を前後する時期と推定されている。いまだ年代を推定できる資料が不十分ではあるが、1世紀代までさかのぼる可能性は十分あり、馬韓の対外交交流を示す重要な資料である。

2) 北方文化の色彩－高句麗と夫余－

ところで、中西部地域の馬韓と北方地域は、どのような関連性があるのだろうか。

最近、清州市五松峰山里で、長さ60cmほどの銅柄鉄剣が韓国地域ではじめて出土し、注目されているが（図4）、イチョンギユ（李清圭）分類の銅柄鉄剣B式、またはC式に該当するものであり（イチョンギユ 2013）、これまで吉林省榆樹老河深遺跡でのみ出土例が知られている（図5・6）。2世紀頃の土壌墓で共伴する新文物として、北方に起源をもつ銅柄鉄剣が新たに加わったことになる。

一方、北方文化の流入と関連して、清州市鳳鳴洞 C-31 号墓と忠州市金陵洞 78-1 号墓で製作技法が酷似する鉄製鐮轡がそれぞれ1点ずつ出土している（図7）。これらの銜は、一条の鉄棒をS字形に曲げて両側の環を作ったのちに、端部をそれぞれ銜本体に鍛接している。引手は二条のスコップの柄形であり、とても小さく作られている。引手を作る鉄棒の片方の先端幅を広く加工し、そこに穴をあけている。そして、鉄棒を曲げて全体の形態をおおよそ作ったのちに、鉄棒の反対側の端部を穴に通してリベットのようにかしめ留める方法で製作している。このような製作技法の轡は、榆樹老河深遺跡をはじめとして、高句麗地域や楽浪地域（平壤市石巖里）でも確認されている。遠くは新疆ウイグル自治区の交河故城と匈奴の故地であるモンゴル地域（ホドゥギントルゴイ1号墳とノヨンオルなど）などで出土しており、東西にわたる広域的な分布がみられる。

このような製作技法の時間的位置については、ノヨンオル6号墓で共伴している「建平五年（紀元前2年）」銘漆杯や石巖里出土品から、上限は紀元前1世紀以前にさかのぼり、下限は高句麗の慈城郡西海里2-1号墳で共伴している歩揺付飾金具が、「戊戌（338年）」年銘瓦当が出土した集安市禹山下992号墓出土品と類似している点を考慮すると、4世紀前半頃まで下りうる。金陵洞出土品は二孔式から変化する過渡期の立聞式金具が付いており、型式学的に西海里出土品より先行するものと考えられている（諫早直人 2007, pp.21～25）。一方、清州市鳳鳴洞 C-31 号のものは、4世紀前半～中頃を前後する時期とみている（成正鏞 2006）。したがって、遅くとも3世

紀頃には嶺南地域と系統を異にする北方系統の馬具文化も移入されるなど、中西部地域には銅柄鉄剣とともに予想以上に多様な北方系文物が流入していることになる。

このような様相は、『三国史記』に百済王室が夫余に淵源をもつ高句麗系として記述されていることとはむしろ対比される様相である。百済中央の核心であるソウル市江南一帯において、いまだ北方系文物が確認されていないのに対し、その外郭地域である金浦地域において楡樹老河深で出土したものと類似した金製耳飾が出土している（図8）。1～2世紀頃における、これら北方系文化の直接的な製作地と流入経路はどのようなものであったのだろうか。おそらく、中間に位置した楽浪郡の存在を無視するわけにはいかないだろう。

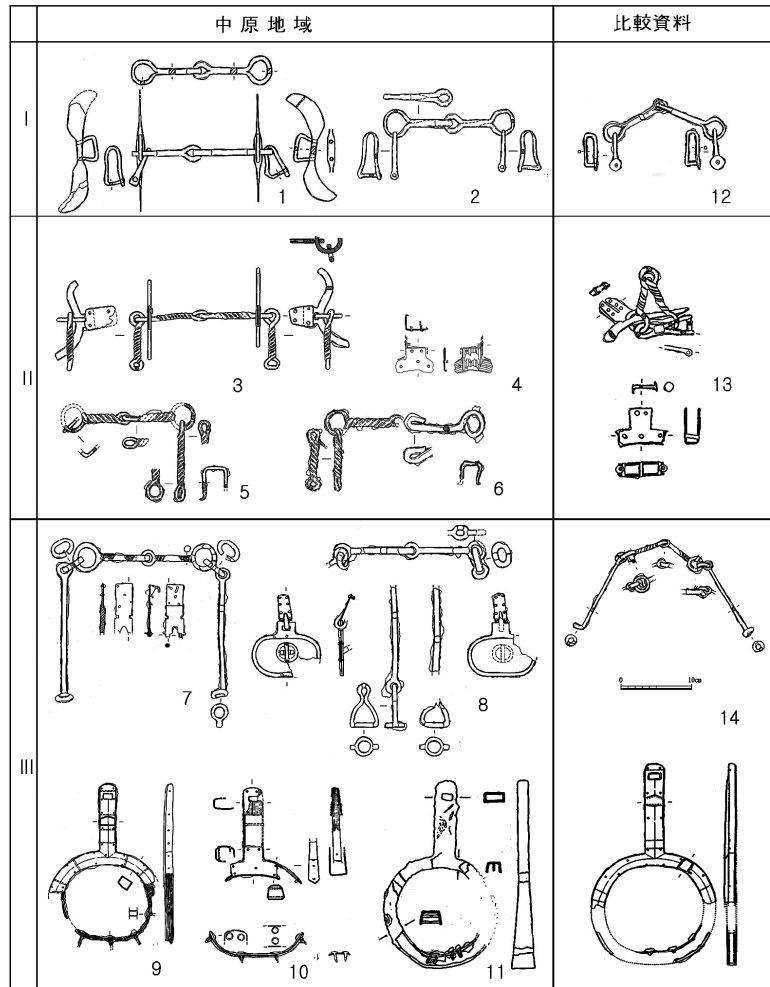


図7 中原地域における馬韓・百済の馬具

1. 忠州市金陵洞 78-1 号 2. 清州市鳳鳴洞 C-31 号 3. 清州市鳳鳴洞 A-31 号 4. 清州市鳳鳴洞 C-9 号 7～11. 清州市新鳳洞 12. モンゴルホドゥギントルゴイ 1 号墳 13. 天安市斗井洞 5 号 14. 原州市法泉里 1 号石室墓

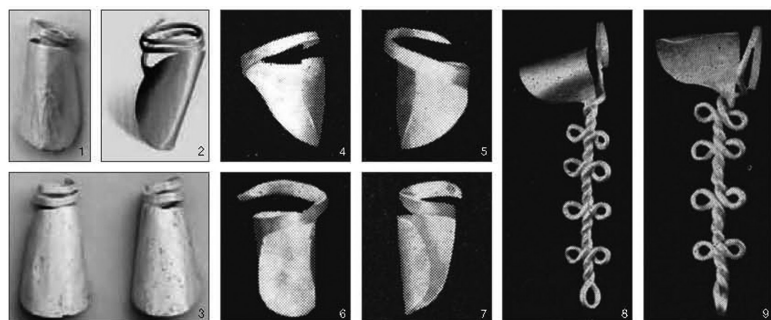


図8 金浦市雲陽洞（1・3）、石湖王八脖子墓群（2）、吉林省楡樹老河深（4～9）出土耳飾（イハンサン 2013：図4引用）

Ⅲ. 百済と中国・北方

1. 文献史料

文献史料によれば、百済と中国との公式的な関係は『晋書』と『三国史記』いずれも 372 年の近肖古王代に現れている（表 3）。その後、漢城期末まで東晋－宋－北魏に公式的な使節を絶えず派遣した記録がみられる。これは百済が東アジア的朝貢－冊封秩序の中に編入されたことを示すが、これを通じて中国の多様な文物が百済社会に流入する契機となった。

表 3 4～5 世紀の百済漢城期における中国との交流

年代	内容	典拠
372	咸安二年 春正月 百済 林邑王 各遣使 貢方物	晉書 簡文帝紀
	二十七年 春正月 遣使入晉朝貢	三國史記 百濟本紀 近肖古王
372	咸安二年 六月遣使 拜百済王餘句爲鎮東將軍 領樂浪太守	晉書 簡文帝紀
373	二十八年 春二月 遣使入晉朝貢	三國史記 百濟本紀 近肖古王
379	五年 春三月 遣使朝晉 其使海上遇惡風 不達而還	三國史記 百濟本紀 近仇首王
379	太元四年 九月 東夷五國遣使來貢方物	晉書 孝武帝紀
384	太元九年 秋七月 百済遣使來貢方物。	〃
	秋七月 遣使入晉朝貢 九月 胡僧摩羅難陀自晉至 王迎致宮内禮敬焉 佛法始於比	三國史記 百濟本紀 枕流王
386	太元十一年 夏四月 以百済王世子餘暉爲使持節 都督鎮東將軍百済王（百済 辰斯王）	〃
406	二月 遣使入晉朝貢	三國史記 百濟本紀 腆支王
416	義熙十二年 以百済王餘映爲使持節都督百済諸軍事鎮東將軍百済王	宋書 夷蠻列傳 百済
	十二年 東晉安帝遣使冊命王爲使持節都督百済諸軍事鎮東將軍百済王	三國史記 百濟本紀 腆支王
424	少帝 景平二年 映遣長史張威詣闕貢獻（百済 久爾辛王）	宋書 夷蠻列傳 百済
425	元嘉二年 太祖詔之曰 皇帝問使持節都督百済諸軍事鎮東大將軍百済王	〃
429	三年 秋 遣使入宋朝貢	三國史記 百濟本紀 毗有王
430	元嘉七年 百済王餘毗復修貢職 以映爵號授之	宋書 夷蠻列傳 百済
	四年 夏四月 宋文皇帝以王復修職貢	三國史記 百濟本紀 毗有王
440	十四年 冬十月 遣使入宋朝貢	〃
450	元嘉二十七年 毗上書獻方物 私假臺使馮野夫西河 太守 表求易林式占。腰弩 太祖並與之	宋書 夷蠻列傳 百済
457	大明元年 遣使求除授 詔許（百済 蓋鹵王）	〃
458	大明二年 慶遣使上表曰 臣國累葉，偏受殊恩，文武良輔，世蒙朝爵。行冠軍將軍右賢王餘紀等十一人，忠勤宜在顯進，伏願垂愍，並聽賜除。仍以行冠軍將軍右賢王餘紀爲冠軍將軍。以行征虜將軍左賢王餘昆。行征虜將軍餘暉並爲征虜將軍。以行輔國將軍餘都。餘乂並爲輔國將軍。以行龍驤將軍沐衿。餘爵並爲龍驤將軍。以行寧朔將軍餘流。麋貴並爲寧朔將軍。以行建武將軍于西。餘婁並爲建武將軍	〃
471	泰始七年（471 年；百済蓋鹵王十七年）又遣使貢獻	〃
472	十八年 遣使朝魏上表曰	三國史記 百濟本紀 蓋鹵王
	魏 延興二年 其王餘慶始遣其冠軍將軍駙馬都尉弗斯侯。長史餘禮。龍驤將軍帶方太守司馬張茂等上表自通	魏書 列傳 百済

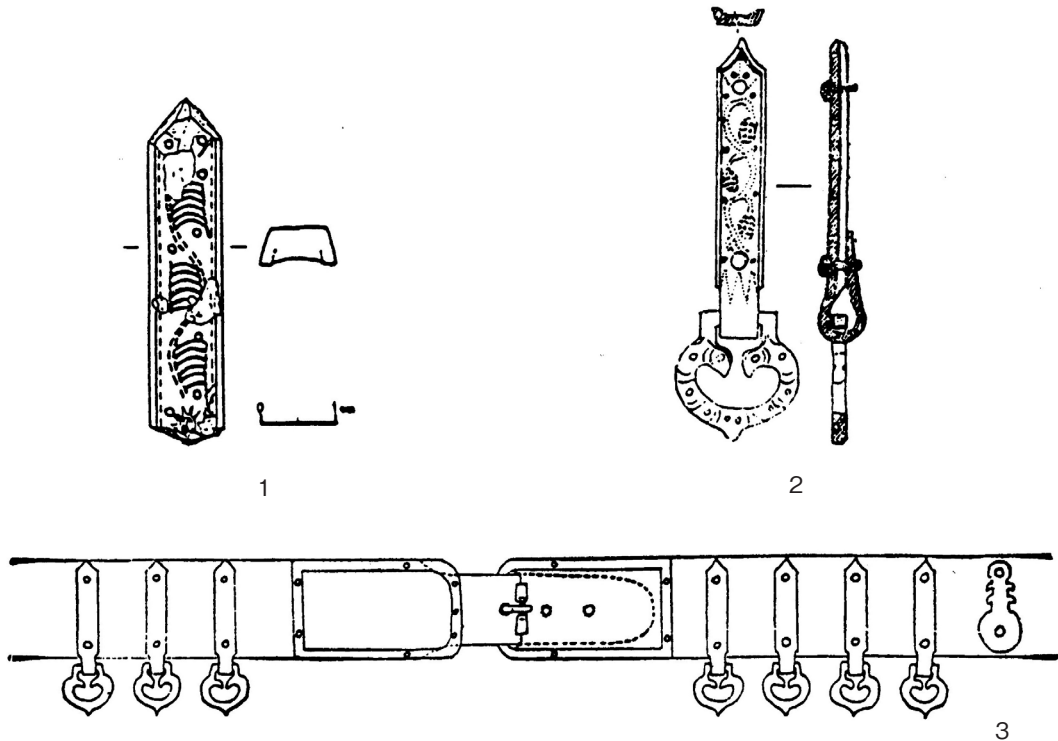


図9 晋代金銅鍔帯金具（バクスンバル 1999：図5）

1：夢村土城 2：中国湖北漢陽 3：鍔帯復元図

2. 考古資料

1) 夢村土城出土金銅鍔帯金具

これは1985年度に出土したもので、異形金銅製品とよばれていたものであるが（図9）、湖北省漢陽県熊家嶺東晋墓で出土したのと類似している。これによって、東晋早期の4世紀前半頃に製作されたものと比定され、文献にみられる百済と東晋との公式的な交渉段階以前に流入した可能性が指摘されている（バクスンバル 1999）。

2) 中国陶磁器

百済と中国との関係を最もよく表している代表的な遺物としては、中国から輸入された陶磁器があげられるだろう。2002年頃までで約100点が出土していたが、現在は200点を上回る（表4・5）。このような状況は、高句麗地域では4～5点、新羅では皇南大塚北墳で1点、加耶地域では釜山市福泉洞古墳群などで数点だけが出土している点と大きく異なっており、百済人の中国文物に対する指向、すなわち百済人の南朝文化に対する憧憬と高級文化に対する享有欲をうかがい知るのに十分である。

百済地域における出土様相をみると、いくつか興味深い様相がうかがえる。中央地域では生活遺跡での出土頻度が顕著に高いのに比べて、地方では古墳に副葬される場合が多いという様相が

みられる。これは中国磁器が百済の中央では実用器として使われたのに対して、地方では威信財としての役割がさらに付与されたことを示しているといえる。一方、泗泚期になると、古墳には副葬されなくなる。これらの入手主体と流通経路について、とくに漢城期の場合は、百済の中央とみる説（三上次男 1976、クォンオヨン 1988）、楽浪・帶方故地の中国系住民の役割を強調する説（キムウォルリョン 1974）、地方勢力が独自に入手したとする説などがあるが、中央地域で普遍的に出土することを勘案すれば、やはりその消費と流通の主体は百済中央とみるのが妥当であろう。一方、泗泚期には扶余を中心として、主に生活遺跡で出土するのに対し、古墳の副葬品は全くみられず、その数も 37 点内外とやはり漢城期よりはるかに少ない。古墳の副葬品がみられないのは薄葬化の傾向にも通じるが、その背景には中国磁器を模倣した鉛釉陶器などが製作されるとともに、熊津期からより華やかな金属器へと百済人の高級文物に対する享有欲が変わったためではないかと考えられる。

百済地域で出土する中国陶磁は、時期による性格の違いだけでなく、その量からみて、単なる使節派遣に対する返礼の次元を越えて、一種の貿易的性格を帯びている。高級文化に対する百済支配層の享有欲を満たす手段であるとともに、地方支配の手段としても使われたのだろう。一方、日本の場合には、8 世紀末以後に、大宰府を中心に貿易陶磁が出現すると、灰釉や緑釉などの施釉陶器が中国の影響によって大量生産され、高級容器に対する幅広い需要が充足されるようになったという（山本信夫 1993）。たとえ百済と時期差はあるにしても、漢城期に中国磁器の代用品が黒色磨研土器であった可能性があることや、泗泚期に磁器を模倣した鉛釉陶器が出土していることは、後代の日本と類似した社会・経済的背景であったことを示唆しているのかもしれない。

表 4 百済の中央遺跡出土中国陶磁現況（イムヨンジン 2012：表 1 に追加）

時期	生活・儀礼		古墳	
	器種	遺跡	器種	遺跡
漢城期	青磁（盤口壺、耳付壺、硯、碗、皿） 黒磁（盤口壺） 黒褐釉（錢文）陶器甕	風納土城 74+ 夢村土城 22+	青磁（盤口壺、耳付壺、 鶏首壺） 黒磁（鶏首壺） 黒褐釉陶器	石村洞 10+ 甘一洞 1
熊津期	黒褐釉陶器 硯	公山城 2	青磁六耳壺 白磁燈蓋 黒磁四耳瓶	武寧王陵 9
泗泚期	青磁（耳付壺、貼花人物文瓶硯、 碗、洗） 黒磁（耳付壺、腕、硯） 白磁（硯）	扶蘇山城 25+ 定林寺址 2 陵寺 5 東南里寺址 4 王興寺址 1		
計	135+		20+	

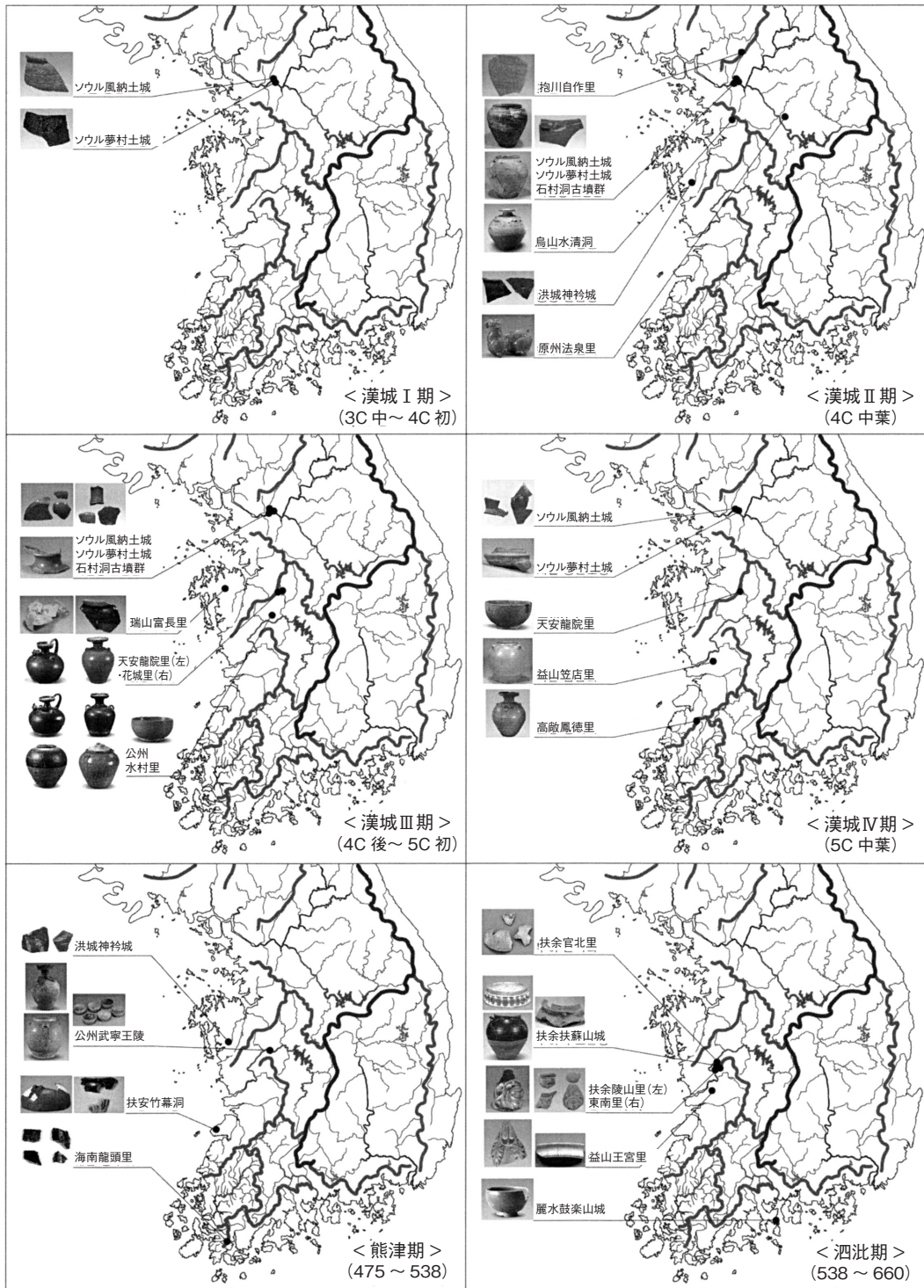


図 10 百済地域出土中国陶磁器の分布例 (イムヨンジン 2012 : 図 5)

表 5 百済の地方遺跡出土中国陶磁現況（イムヨンジン 2012：表 1 に追加）

時期	生活・儀礼		古墳	
	器種	遺跡	器種	遺跡
漢城期	青磁（両耳付壺、盤口壺、 花形碗、碗） 黒褐釉（銭文）陶器	抱川郡自作里 1 龍仁市古林洞 1 東海市松亭洞 1 洪城郡神衿城 3 洪城郡南長里 1 扶安郡竹幕洞 2	青磁（盤口壺、四耳壺、 碗、羊形器） 黒磁（鶏首壺）	烏山市水清洞 1 原州市法泉里 3 瑞山市富長里 2 天安市龍院里 4 天安市花城里 1 公州市水村里 5 錦山郡寿堂里 1 高敞郡鳳德里 4
熊津期			黒褐釉陶器	海南郡龍頭里 1+
泗沘期	青磁（尊、硯、碗） 白磁（碗）	益山市王宮里 6 順天市剣丹山城 5 麗水市鼓楽山城 1		
計	21		22+	

Ⅳ. 百済と倭

1. 文献史料

漢城期の百済と倭との関係は、まず『三国史記』と『日本書紀』の記録を通じて知ることができる（表 6）。『日本書紀』によれば、百済と倭は修正紀年で 366 年（近肖古王 21 年、神功 46 年：246 年）にはじめて通交している。日本の考古学界では『日本書紀』の初期記録を信用しない傾向が強いが、二つの史書の記録を対比してみれば、『日本書紀』の記録が百済と倭との関係のみならず、百済史を復元するのにも有用な資料として活用されうる余地が大きい。

両国の関係は、とくに百済が 397 年に太子腆支を人質として倭に遣わし、405 年に腆支が即位のために帰国するときには倭兵 100 名が護衛したという記事によく表れている。これは百済が高句麗の広開土大王に圧迫され、倭の軍事的支援を切実に必要とする状況を反映しており、百済はそのみかえりとして倭に対して高級文化と技術の伝授者としての役割（404 年の阿直伎と王仁の派遣）を果たしたのではないだろうか。

2. 考古資料

このような文献史料とは異なり、倭と百済の中央との関係を直接的に示す考古資料はむしろ少なかった。ただし、風納土城から 5 世紀中頃と推定される埴輪片が 1 点出土しており、1985 年に夢村土城で出土した蓋杯 1 点も、近年、須恵器の TK23 型式にあたることが明らかにされた。これらは両者の歴史的関係を復元する契機になるとともに、蓋杯は日本の須恵器編年を間接的に裏付ける資料ともなりうる。

表6 漢城期の百済と倭の交流

年代	内容	典拠
366	遣于百濟國 慰勞其王 時百濟肖古王 深之歡喜 而厚遇焉 仍以五色彩絹各一匹 及角弓剪 並鐵鋌四十枚 幣爾波移 便復開寶藏 以示諸珍異曰 吾國多有是珍寶 欲貢貴國 不知道路 有志無從 然有今付使者 尋貢獻耳 於是 爾波移奉事而還 告志摩宿禰 便自卓淳還之也	『日本書紀』神功紀 46 年 (百濟・近肖古王 21)
392	是歲 是歲百濟辰斯王立之失禮於貴國天皇 故遣紀角宿禰 羽田矢代宿禰 石川宿禰 木菟宿禰 噴讓其无禮狀 由是 百濟國殺辰斯王以謝之 紀角宿禰等便立阿花爲王而歸	『日本書紀』応神天皇 3 年 (百濟・阿莘王 1 年)
397	春三月 百濟人來朝 〔百濟記云。阿花王立无禮於貴國。故奪我枕彌多禮。及■南。支侵。谷那東韓之地。是以遣王子直支于天朝 以脩先王之好也 夏五月 王與倭國結好 以太子腆支爲質	『日本書紀』応神天皇 8 年 『三國史記』百濟本紀阿辛王 6 年
403	春二月 倭國使者至 王迎勞之特厚	『三國史記』百濟本紀阿辛王 12 年
404	秋八月壬戌朔丁卯 百濟王遣阿直岐 貢良馬二匹 即養於輕坂上廐 因以以阿直岐令掌飼 故號其養馬之處曰廐坂也 阿直岐亦能讀經典	『日本書紀』応神天皇 15 年 (百濟 阿莘王 13 年)
405	是歲 百濟阿花王薨 天皇召直支王謂之曰 汝返於國以嗣位 仍且賜東韓之地而遣之 腆支在倭聞訃 哭泣請歸 倭王以兵士百人衛送 既至國界 漢城人解忠來告曰 大王棄世 王弟磔禮殺兄自立 願太子無輕入 腆支留倭人自衛 依海島以待之 國人殺磔禮 迎腆支即位	『日本書紀』応神天皇 16 年 (百濟・腆支王 1 年) 『三國史記』百濟本紀腆支王 1 年
409	春二月 百濟直支王遣其妹新齊都媛以令任爰新齊都媛率七婦女而來歸焉	『日本書紀』応神天皇 39 年 (百濟・腆支王 5 年)
409	倭國遣使送夜明珠 王優禮待之	『三國史記』百濟本紀腆支王 5 年
418	夏 遣使倭國 送白綿十匹	『三國史記』百濟本紀腆支王 14 年
428	春二月 百濟直支王遣其妹新齊都媛以令任爰新齊都媛率七婦女而來歸焉 春二月 倭國使至 從者五十人	『日本書紀』応神天皇 39 年 (百濟・毗有王 2 年) 『三國史記』百濟本紀毗有王 2 年
461	夏四月百濟加須利君飛聞池津媛之所燔殺而籌議曰 昔貢女人爲采女 而既無禮 失我國名 自今以後不合貢女 乃告其弟軍君曰汝宜往日本以事天皇 軍君對曰 上君之命不可奉違 願賜君婦而後奉遣 加須利君則以孕婦 既嫁與軍君曰 我之孕婦既當產月 若於路產 冀載一船 隨至何處速令送國 遂與辭訣奉遣於朝六月丙戌 朔孕婦果如加須利君言 於筑紫各羅嶋產兒 仍名此兒曰嶋君 於是軍君即以一船送嶋君於國 是爲武寧王 百濟人呼此嶋曰主嶋也	『日本書紀』雄略天皇五年 (百濟・蓋鹵王 7 年)

一方、大阪の北側地域から出土した百済系土器の存在も注目される（図 13）。1977 年に調査された豊中市利倉西遺跡で須恵器と共に出土した壺 1 点がそれである。これは器高 17.5cm の小壺で、球形の胴体に丸底、大きく外反する頸部、格子目タタキののちに横方向に削る手法、低い焼成温度などが百済土器の広口長頸壺の特徴を忠実に反映しており、4 世紀末～5 世紀初頭に編年できる資料である。これは大田・清州などの錦江流域の内陸地域で生産されたものか、あるいは少なくともその地域の工人が日本列島に来て直接的に生産に関与した製品とみられる。時期的には、百済の阿莘王（392～405 年）～腆支王（405～420 年）代と倭の応神天皇（390～430 年）

修正紀年) 代における関係を示すものと考えられるが、問題はその流入経路である。錦江流域の集団が近畿地方と直接交渉した可能性も排除できないが、百済の中央と倭の交渉に錦江流域の集団が一員として関与したか、あるいは媒介的役割を果たしたのであろう。また、この土器は威信財ではないので、いかなる目的で倭を経て豊中地域まで搬入されたのかも明らかにすべきである。



図 11
七支刀



図 12 京都市中臣遺跡出土百済系
鳥足文土器



図 13 大阪府豊中市利倉西遺跡出土百済系
広口長頸壺

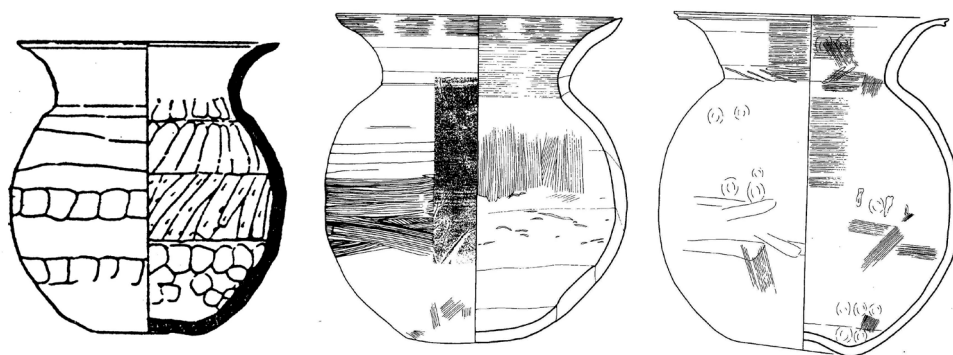


図 14 百済系広口長頸壺

(左：大阪府豊中市利倉西遺跡、中：錦山郡水塘里 2 号石槨墓、右：大田市龍山洞 3 号土槨墓)



図 15 TK23 型式の須恵器

(左：ソウル市夢村土城、中・右：新鳳洞 B-1・A-31 号土槨墓)

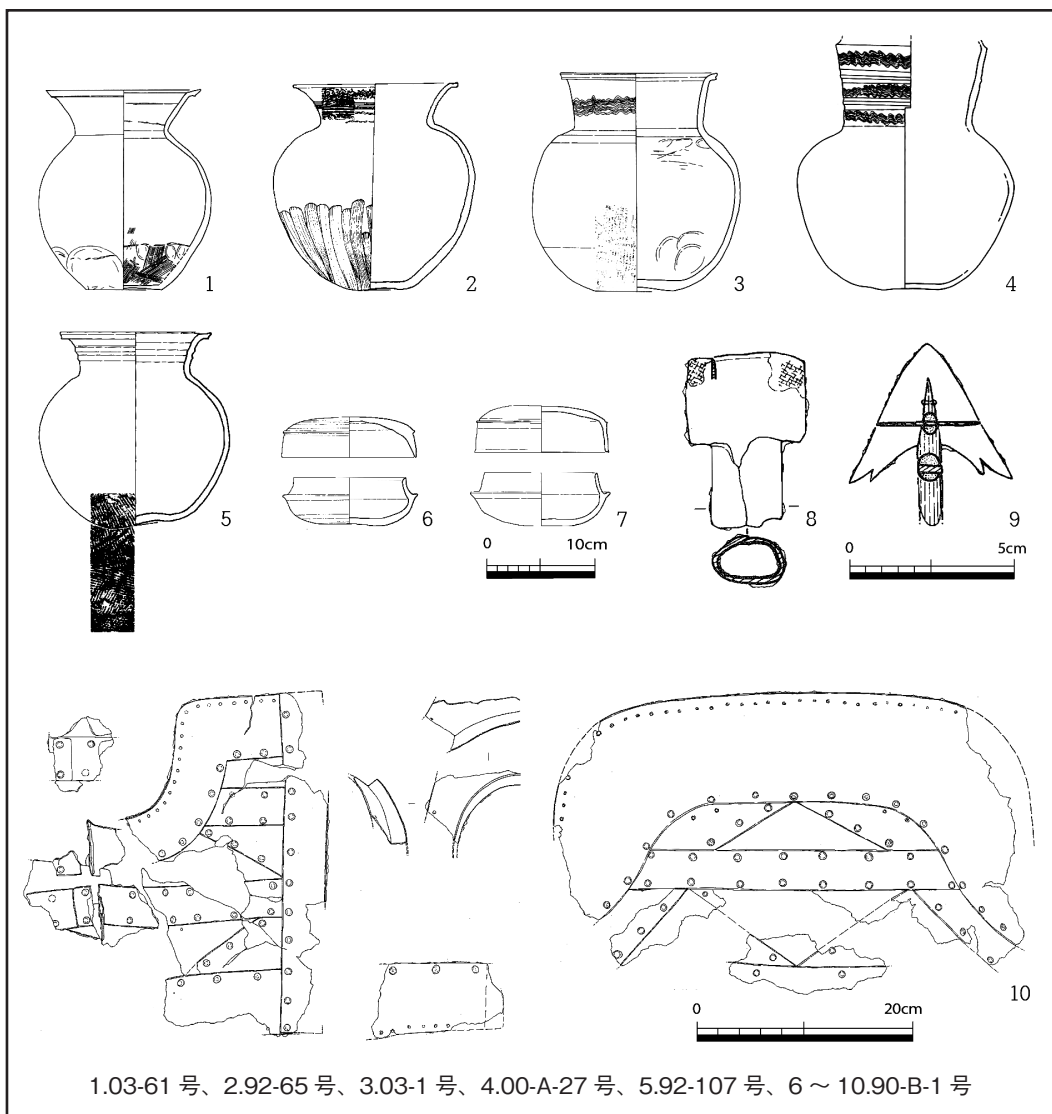


図 16 清州市新鳳洞古墳群出土外来系遺物

[参考文献]

諫早直人 2007, 「製作技術로 본 夫餘의 轆와 韓半島 南部의 初期 轆」, 『嶺南考古學』 43, 嶺南考古學會, pp.5~32.

(諫早直人 2007 「製作技術からみた扶余の轆と韓半島南部の初期轆」 『嶺南考古學』 43, 嶺南考古学会, pp.5~32)

高久健二 1995, 『樂浪古墳文化研究』, 學研文化社.

권오영 (權五榮) 1988, 「4 世紀 百濟의 地方統制方式 一例－東晋青磁의 流入經緯를 中心으로－」, 『韓國史論』 18, 서울大學校 國史學科, pp.3~28.

(クォンオヨン 1988 「4 世紀における百濟の地方統制方式の一例－東晋青磁の流入經緯を中心に－」 『韓國史論』 18, ソウル大学校国史学科, pp.3~28)

- 김기옥 2014, 「경기지역 마한 분구묘의 구조와 출토유물」, 『한국고고학의 신지평』, 제 38 회 한국고고학 전국대회 발표요지문, pp.196~202.
- (キムギョク 2014「京畿地域の馬韓墳丘墓の構造と出土遺物」『韓国考古学の新天地』第38回韓国考古学全国大会発表要旨文, pp.196~202)
- 김선옥 2015, 「한반도 중남부지역 원삼국~삼국시대 토광합장묘 연구」, 『제 27 회 고분문화연구회 발표 자료집』, 고분문화연구회.
- (キムソン옥 2015「韓半島中南部地域における原三国~三国時代の土坑合葬墓研究」『第27回古墳文化研究会発表資料集』古墳文化研究会)
- 김성남 (金成南) 2003, 「中部地方 3~4 세기 古墳群 細部編年」, 『百濟研究』 第 33 輯, 忠南大學校 百濟研究所, pp.109~162.
- (キムソンナム 2003「中部地方における3~4世紀の古墳群細部編年」『百濟研究』第33集, 忠南大学校百濟研究所, pp.109~162)
- 김원룡 (金元龍) 1974, 「中國에서의 新出考古資料二種」, 『考古美術』 121・122 號.
- (キムウォルリョン 1974「中國における新出考古資料二種」『考古美術』121・122号)
- 김장석 2014, 「중부지역 격자문달토기와 U 자형토기의 등장」, 『韓國考古學報』 90, 韓國考古學會.
- (キムジャンсок 2014「中部地域における格子文打捺土器とU字形土器の登場」『韓国考古學報』90, 韓國考古学会)
- 武末純一 2012, 「新鳳洞古墳群에서 보이는 日本文化系 要素」, 『百濟學報』 8, 百濟學會, pp.177~188.
- (武末純一 2012「新鳳洞古墳群にみられる日本文化系要素」『百濟學報』8, 百濟学会, pp.177~188)
- 박순발 (朴淳發) 1993, 「우리나라 初期鐵器文化의 展開過程에 對한 약간의 考察」, 『考古美術史論』 3, 忠北大學校 考古美術史學科.
- (パクスン발 1993「韓國初期鐵器文化の展開過程に対する若干の考察」『考古美術史論』3, 忠北大学校考古美術史学科)
- 박순발 (朴淳發) 1998, 「前期 馬韓의 時・空間的 位置에 대하여」, 『馬韓史 研究』, 百濟研究叢書 第 6 輯, 忠南大學校 出版部, pp.1~43.
- (パクスン발 1998「前期馬韓の時・空間的位置について」『馬韓史研究』百濟研究叢書第6集, 忠南大学校出版部, pp.1~43)
- 박순발 (朴淳發) 1999, 「漢城百濟의 對外關係」, 『百濟研究』 30, 忠南大學校百濟研究所, pp.29~48.
- (パクスン발 1999「漢城百濟の對外關係」『百濟研究』30, 忠南大学校百濟研究所, pp.29~48)
- 박순발 (朴淳發) 2012, 「유물상으로 본 백제의 영역화과정」, 『백제, 마한과 하나되다』, 한성백제박물관 2013 여름 특별전, pp.120~133.
- (パクスン발 2012「遺物相からみた百濟の領域化過程」『百濟, 馬韓と一つになる』漢城百濟博物館 2013 夏季特別展, pp.120~133)
- 박중균 (朴重均) 2012, 「금강유역 문화의 지역성과 '國'의 존재양태」, 『湖西考古學』 제 23 회 호서고고학회 학술대회 발표요지, 호서고고학회, pp.181~214.
- (박추운기윤 2012「錦江流域文化の地域性と「國」の存在様態」『湖西考古學』第23回湖西考古学会學術大會発表要旨, 湖西考古学会, pp.181~214)
- 白雲翔 2017, 「紀元前 1 千年紀 後半 韓中 交流의 考古學的 探究」, 『東아시아에서의 韓國上古史』韓國上古史學會 創立 30 周年紀念學術會議.
- (白雲翔 2017「紀元前1千年紀後半における韓中交流の考古學的探究」『東アジアにおける韓國上古史』韓國上古史学会 30 周年紀念學術會議)
- 山本信夫 1993「大宰府と貿易陶磁」『大宰府市史 考古資料編』第二編 大宰府の時代, pp.670~686

三上次男 1976 「漢江地域發見四世紀越州窯青磁初期百濟文化」『朝鮮學報』第 81 集, 朝鮮学会, pp.357~380

성정용 (成正鏞) 1998, 「3~5 世紀 錦江流域 馬韓・百濟 墓制의 樣相」, 『3~5 世紀 錦江流域의 考古學』 제 22 회 한국고고학전국대회 발표요지문, 韓國考古學會.

(ソンヂョンヨン 1998 「3~5 世紀の錦江流域における馬韓・百濟墓制の樣相」『3~5 世紀錦江流域の考古學』第 22 回韓國考古學全國大會發表要旨文, 韓國考古學會)

성정용 (成正鏞) 2000, 『中西部馬韓地域의 百濟領域化過程研究』, 서울大學校大學院 文學博士學位論文.

(ソンヂョンヨン 2000 『中西部馬韓地域の百濟領域化過程研究』ソウル大學校大學院文學博士學位論文)

성정용 (成正鏞) 2005, 「錦江流域 原三國時代 土器樣相에 대해」, 『原三國時代 文化의 地域性과 變動』 제 29 회 한국고고학전국대회 발표요지문, 韓國考古學會, pp.33~66.

(ソンヂョンヨン 2005 「錦江流域における原三國時代の土器樣相について」『原三國時代文化の地域性と變動』第 29 回韓國考古學全國大會發表要旨文, 韓國考古學會, pp.33~66)

성정용 (成正鏞) 2006, 「제 6 장 원삼국시대」, 『충청남도지 3- 선사에서 백제로』, 충청남도지편찬위원회.

(ソンヂョンヨン 2006 「第 6 章 原三國時代」『忠清南道誌 3 - 先史から百濟に』忠清南道誌編纂委員會)

성정용 (成正鏞), 권도희 (權度希), 諫早直人 2009, 「清州 鳳鳴洞遺蹟 出土 馬具의 製作技術 檢討」, 『湖西考古學』 20, 湖西考古學會, pp.106~132.

(ソンヂョンヨン・クォンドヒ・諫早直人 2009 「清州鳳鳴洞遺蹟出土馬具の製作技術の檢討」『湖西考古學』 20, 湖西考古學會, pp.106~132)

신종환 (申鐘煥) 1996, 「清州 新鳳洞遺蹟의 外來的要素에 관한 一考 - 90B-1 號墳을 中心으로 -」, 『嶺南考古學』 18, 嶺南考古學會, pp.87~108.

(シンヂョンファン 1996 「清州新鳳洞遺蹟の外來的要素に関する一考 - 90B-1 号墳を中心に -」『嶺南考古學』 18, 嶺南考古學會, pp.87~108)

이정규 (李清圭) 2013, 「中國東北地域과 韓半島의 合鑄式 銅柄 銅劍・鐵劍에 對하여」, 『白山學報』 93, 白山學會, pp.5~43.

(이췌온규 2013 「中国東北地域と韓半島の合鑄式銅柄銅劍・鉄劍について」『白山學報』 93, 白山學會, pp.5~43)

이한상 (李漢詳) 2013, 「김포 운양동유적 출토 금제이식에 대한 검토」, 『김포 운양동유적 II (2 권)』, 한강문화재연구원, pp.259~266.

(イハンサン 2013 「金浦雲陽洞遺蹟出土金製耳飾に對する檢討」『金浦雲陽洞遺蹟 II (2 卷)』漢江文化財研究院, pp.259~266)

임영진 (林永珍) 2012, 「中國 六朝磁器의 百濟 導入背景」, 『韓國考古學報』第 83 輯, 韓國考古學會, pp.4~47.

(임영진 2012 「中国六朝磁器の百濟導入背景」『韓國考古學報』第 83 集, 韓國考古學會, pp.4~47)

정인성 (鄭仁盛) 2011, 「樂浪古墳의 특징과 변천」, 『동아시아의 고분문화』, 서경문화사.

(チョン인성 2011 「樂浪古墳の特徵と變遷」『東アジアの古墳文化』書景文化社)

조대연 2007, 「초기철기시대 납-바륨 유리에 관한 고찰」, 『韓國考古學報』 63, 韓國考古學會.

(조대연 2007 「初期鉄器時代の鉛・バリウムガラスに関する考察」『韓國考古學報』 63, 韓國考古學會)

조상기 (趙詳紀) 2016, 「청주시역 백제토기의 성립과 전개과정」, 『청주, 백제를 품다』충청북도문화재연구원 十年의 발자취 학술세미나.

(조상기 2016 「清州地域の百濟土器の成立と展開過程」『清州, 百濟を抱く』忠清北道文化財研究院 十年の足跡學術セミナー)

지민주 2013, 「중부지역 마한 분묘 출토 토기류의 성격 - 2 세기대 유적을 중심으로 -」, 『중부지역 원삼

- 국시대 타날문토기의 등장과 전개』, 제 10 회 대산기념강좌 발표요지문, 숭실대학교박물관.
(チミンヂュ 2013「中部地域における馬韓墳墓出土土器類の性格－2世紀代の遺跡を中心に－」『中部地域の原三国時代における打捺文土器の登場と展開』第 10 回梅山記念講座発表要旨文, 崇実大學校博物館)
- 천관우 (千寬宇) 1979, 「馬韓諸國의 位置 時論」, 『東洋學』 9, 檀國大學校 附設 東洋學研究所.
(チョングァヌ 1979「馬韓諸国の位置時論」『東洋学』 9, 檀国大學校附設東洋学研究所)